Osaka Shoin Women's University Repository

猿蓑鑑賞——鳶羽連句

細川　馨

猿蓑集「さるみのしふ」は元禄三年向井去来、宮城凡兆が芭蕉の厳重な指導のもとに撰んだもので巻名は「初しぐれ猿も小蓑をほしげなり」という句から名づけられたものであろう。六巻二冊からなつている。晋其角の序。丈艸の跋。巻一冬の発句　巻二夏の発句　巻三秋の発句　巻四春の発句　計発句三百八十二　巻五連句四歌仙巻六幻住庵記等を収めている。

猿蓑集は芭蕉俳諧の閑寂味なるものが頂点に達したと評せられている。許六は猿蓑を俳諧の「古今集」と推賞し初心の人は猿蓑から俳諧に入れといひ、支考は猿蓑に至つて花実兼ね備うと称揚している。芭蕉俳諧の真髄は巧まず凝らず最も自然に表現せられていて発句といい連句といいすべて後世の亀鑑となつた。ここに選んだ鳶羽の連句の如きは圧巻というべきであろう。

猿蓑の其角の序に

「幻術の第一としてその句に魂の入らざればゆめにゆめみるに似たるべし」とあるのを見ても察せられる。幻術とは形なきものを目にもみせ耳にもきかせる手段である。俳諧は無心のものに魂を入れて働かせる幻術をなす道であるというのである。

さて連句の生命について考えてみよう。連句中の一句は前後の句の助けをかりて単に一句をみるのとは異り、遙かに多くの感興を起すのである。この前と後との二句が中の一句の感興を助け長ずるということは連句の一大

Osaka Shoin Women's University Repository

特色であつて短かい十七、十四の中に人生を成立させる所以である。三十六首の和歌や俳句を並べたのでなくて統一ある変化の中に人間味豊かな、そして自然の味を生かした豊富な連想を楽しませる点にあると思う。

誰かの説明に「蕉風俳諧の主張となつている閑寂の気分なるものは概していへば複雑を簡朴で統べ、不快を快にそめ、興奮を沈静で燻し、いかなる緊張をも弛緩の空気で包むという風であると述べている。そして付合に於ける前後の句と句との反映、対象からくる美感を「うつり」といい、句がリズミカルな音調上の諧律をなしている場合これを「ひびき」とよび、縹渺たる風韻、余情を「にほひ」と名づけ、句の品位、あり場所、姿様の美、その品格の高さには「くらゐ」と称している。芭蕉俳諧のこれらの美意識、移、匂、響、位というのは要するに前句の趣向、風趣から生ずる連想の美であつて前句の意味から来る連想ではない。すべて前句の意義を考え、意味を見定めて情を引き来るを嫌う。かくの如く意義から連想するものは「ベタ付」と称して取らない。連句の付合が古風の「物付け」から談林の「心付け」となり蕉風の「匂付け」となつてひたすら前句の余韻によつて付けることとなつた。素晴らしい飛躍と思う。

ここに芭蕉俳諧の最高峰ともいうべき「猿蓑集」の鳶羽の歌仙一巻を表六句裏十二句名残の裏六句の順序に従つて鑑賞してみたい。

（発句）

鳶の羽も刷ひぬ初時雨　　去来

冬の句。景。発句冬なれば脇句冬。第三句は冬又は雑。初時雨がふる中を鳶が立木の枝等にとまつて今しがた濡れた羽を足でかいてそろえている。「かいつくらふ」「掻きつくらふ」の音便である。よく見受ける光景で掻いておいてぶるぶるとふるわして毛並をそろえることである。鳶の位置は枯木でも屋根の片隅でもよいと思う。鳶の羽もという「も」という助詞の使い方がよくきいている。「鳶も羽を」「鳶は羽を」「鳶の羽を」すべて不十分である。「鳶の羽も」と羽が浮彫りにされた所が重要である。大切な発句を芭蕉が詠まないで高門去来に詠ませた所が弟子思いで美しい。

Osaka Shoin Women's University Repository

（脇句）

一吹き風の木の葉静まる　　芭蕉

冬。景。いい句である。さつと一陣の風が吹いてきて立木の木の葉がカサコソと散つていつたがその風が通りすぎると木の葉も落ちついてもとの静寂に帰つたというので、発句の趣向より更に一段と静寂の趣きである。

鳥啼いて山更に幽なり（梁の王籍）という詩よりも更に深い味わいがある。

脇句は十分に発句の意をくみとつてその余意を述べねばならない。これで一小段落がついたのであるが脇句は付属物である軽味を持たせることが肝要である。名詞でとめることも多い。脇五体というのは、打添（余情余景）相対（前の句の趣向に相対す即ち同じ趣向の句）違付（相反する趣向コントラストの妙）頃留（何々の頃ととめる）心付（前句の意を汲み意に従つてつける）である。

第三句

股引の朝からぬるる川越えて　　凡兆

雑。事。股引という風変りなものをもつて来た。朝旅に出ることは心も爽やかで静中動ありといつた感じである。余り深い川ではないが朝から股引をぬらして川を渡るということは一種の不安を感ずることである。第三句はこれから大いに変化を試みるのであるから、その最初として一直線にすらすらと叙することが大切である。句の終を、て、らん、にて、もなし、なれや等の助詞で結ぶことが多い。

第四句

狸をおどす篠張の弓　　史邦

雑。事。昔の旅立ちは七ツ（午前四時）という朝早い時間に出発したので、狸に化かされぬ用意に篠竹で張つた弓を持つて出たという。荒涼たる山野を思い浮べる時力み返つた旅人の姿が目に写る。前の句の趣向にごく軽く付けたものである。

第五句

Osaka Shoin Women's University Repository

まひら戸に蔦はひかゝる宵の月　　芭蕉

秋の句。景。月の定座

まひら戸は横に細い桟のある戸である。

まひら戸に蔦が這いかかつて、そこへ七、八日頃までの宵の月がさしている光景は人の住む住まぬに論なく荒涼たる凄い感じである。狸が出る荒涼たる山野の趣向をここにひびかせていて流石に翁の句だけあると感じいる。前の句と違つてこの句はどこか幽遠な趣があつて凄さの中に、花やかさがある。

まひら戸の奥には未摘花が棲んでいるかもしれない。

表五句目は月の定座。発句秋なれば月は発句より第三の中に入れ、ここの三句を春、夏、冬、雑等にする。

第六句

人にもくれず名物の梨　　去来

秋。情。人にもくれずというのは吝嗇ではない。名物になるようなものを人に分けるでもなく、くさらせてもすてて置いて、何とも思はないという名利にうとい風流人と見るべきである。勿論自分もたべない。何となく由緒ある人の生活を思い出させる。

この句は折端という。表六句はこれで終つた。連句全体から云うと序曲である。

六句目は神祇、釈教、恋、無常、述懐、羈旅、名所、人名等を省き詩材を収め叙事叙景で辛棒して比較的穏やかに終り裏に至つて大いに変化をとげようとする。

裏

かきなぐる墨絵をかしく烋くれて　　史邦

かきなぐるというのは興に乗つて書きまくるということで、粗雑にかくのではない。墨絵をかしくとは墨絵をかきなぐることがをかしいのである。をかしくは興味がわいてくることである。名物の梨を人にもくれてやらないという様な風流な生活の余韻は秋の暮にわび住居をしている一人の隠者がつれ〴〵のあまり水墨絵をかきなぐ

Osaka Shoin Women's University Repository

つて一人慰めている風情と匂いあつていると思う。

裏移りの句である。

第六句が秋であるので同じ季に従つてこの句も秋である。秋は書道上字形を左右置きかえたにすぎない。この句を秋とせず述懐等の句とすると「待兼」といい見苦しいこととして批難せられる。

はき心地よきめりやすの足袋　　凡兆

冬。情。meias はポルトガル語、靴下のことである。メリヤス製のタビでなくてメリヤスと称する足袋である。（山田孝雄博士説）という。墨絵をかきなぐつて一人慰めている風情はしつくりとしたはき心地よいメリヤスの足袋のいかにも心持よくみたされた趣でついている。

何事も無言の中は静かなり　　去来

雑。情。無言でいても心ある人はそれぞれ感じているので、すべて自分の心の中で内心の興味に於て感じている中はよい。それを口に出すと駄目になる。背景にはやかましい世界がある。

里みえそめて午の貝ふく　　芭蕉

雑。事。深山幽谷を通つて里に近づいた山伏が里が見えて来て「午の貝」を吹き出した。無言熟して中から動き出した光景である。

紕（ほつ）れたる去年の寝蓙のしたゝるく　　凡兆

雑。山伏が午の貝を吹いて里にはいつていつて人の縁先などを借りて昼食をしようとして出してくれた寝蓙はみみがほつれ何となくしめつぽくてしとしととして気持がわるい、いささか当惑した風情である。

芙容の花のはら〳〵と散る　　史邦

景。春。花の句。芙蓉は散るという言葉から考えて夏咲く蓮の花である。木の芙蓉は秋咲くが散らない。前の句は寝蓙で昼寝をした人がしたたるい気持から覚めてさつぱりとした清らかな蓮の花のはらはらと散る光景を目にして清められた趣きである。

Osaka Shoin Women's University Repository

吸物はまづでかされし水前寺　芭蕉

情。雑。すいぜんじ苔は熊本江津川上三里ばかりの所にある水前寺の近くに出来る水前寺海苔で暗緑色、五、六月に採集して乾燥させ紺緑色の薄板状にする。水に浸して酢で賞味する。

吸物が出たのは先ず水前寺海苔でさつぱりとした気分である。蓮の花の散る情趣に通う。

三里あまりの道抱へける　去来

情。雑。御馳走は沢山あるが先ず水前寺海苔が出た。これから行く先はまだ三里あまりの道程である。前途への期待の心が大きい。

この春も盧同が男居なりにて　史邦

春。情。この春も盧同の所に仕えている下僕が出替り時期もすんだ今日、ずるずるべつたりになつて居るわい。支那では二月二日が下僕の出替りになつていたのが後に三月になつたらしい。前の句の前途がまだ三里といつた気持がひびいて「あいつまだいるわい」という気持が面白い。

さし木つきたる月の朧夜　凡兆

春。景。さし木をして置いたのがいつつくだろうと注意していたらついたということがわかつて喜んだ。それは丁度朧月夜の晩であつた。前の句もこの句も落ちついた気分でついている。

苔ながら花に並ぶる手水鉢　芭蕉

春。花の定座。花といえば桜であろう。泥に埋つて苔の生えている手水鉢を桜花に並べるというのは、まことに閑寂で風流な美しい光景である。さし木つきたる月の朧夜という閑寂そのものの情趣がこの句までうつつて来ている。

独り直りし今朝の腹立　去来

雑。情。花に並ぶる手水鉢という落ちついた気持はこの句にひびいている。今朝あれ程癇癪を起したのにいつのまにかすつかり直つたという端的な行動をとらえたものである。

Osaka Shoin Women's University Repository

二ノ表

一時に二日のものも食うて置き　　凡兆

雑。情。非常にむら気で気まぐれでどうかすると一度に二日の食糧をたべて置くという様な人物を詠んだので、前の句に見る俄かに怒り出したと思うと急に機嫌が直るという風なむら気の性格をとり出してそのきまぐれさを両句にひびかせている。

雪気に寒き島の北風　　史邦

冬。景。本土との交通も思うにまかせぬ島の冬は雪気を運ぶ北風が毎日吹いて食物の供給も十分でない。かかる不自由な島の生活はつい一時に二日のものも食うて置きという風になり勝である。想像の句である。

火灯しにくるれば登る峯の寺　　去来

雑。景。日が暮れると火をともす為に峰の寺へ上る。沖の方からは燈明を目指して舟がよってくる。島の光景と考え合せてつけた句である。

ほとゝぎす皆啼きじまひたり　　芭蕉

夏。事。啼きじまうというのは一つの動詞である。そのものズバリの端的な表現である。「火灯しにくるれば登る峯の寺」はいかにも静寂な気分である。ほととぎすは残らず啼いてしまったさびしい情趣は前の句に通っている。

痩骨にまだ起き直る力なき　　史邦

雑。情。病後の身で痩せ衰えた人間が起き直る力もなく容易に起き直れないという淋しさ、悲しさ、哀愁を詠んだ句で底しれぬ暗さが前の句とひびき合っていると思う。

隣りをかりて車引き込む　　凡兆

雑。情。車に乗って訪れた家の主は、門から戸を開けようとするが病後で起き直れないので思案する。訪れた方も鍵がなく仕方なしに隣をかりて車をひきこむというのであろう。

Osaka Shoin Women's University Repository

源氏が乳母を尋ねていつたが乳母の許に鍵がなくて源氏を一時外で待たせたことがあつた。これは夕顔の俤ではなくて乳母のことであつた。

うき人を枳殻垣より潜らせむ　　芭蕉

恋の句。情。非常に劇的なラブシーンである。自分の愛人を枳殻垣からでも逃がそうかと女がドギマギしている所を描いたものであると思う。

前の句よりもつと烈しくて強い場面である。自信満々の句である。

今や別れの刀さし出す　　去来

恋。情。別というと恋の場合が多い。男が女の許に別れに来た。刀を預けて語りあいいざ出るとなると別れたくはない。しかし別れてゆかねばならぬ。女は男に別れの刀を差し出すという風情である。今日であれば今や別れの帽子差し出すという所。今やの「や」は人間の迫つた気持を表している。

せはしげに櫛で頭を掻き散らし　　凡兆

恋。情。せつぱ詰つたジレツタイ気持のある種の女が邪見でやけに烈しく櫛で頭を掻いている様子である。少し頭に来ている女の動作が鮮明に描かれている。

前の句とのひびき合いは強い。

思ひ切りたる死ぐるひみよ　　史邦

雑。情。自分の様なものでも死に物狂いになればどれだけのことが出来るか見ているがよい。きつと思いしらせてやるからという切羽詰つた覚悟の程を見せようとしたもので、実に急迫した気持が端的に述べられている。

前の句と同じ趣向である。

青天に有明月の朝ぼらけ　　去来

秋。月の定座。からりと晴れ上つた青々とした空に有明の月がほんのりと残つて居る夜明けの光景である。爽やかさ、朗らかさと共に遙かな感じが出ている。前句との付味は、誰かが云つたように、断崖に手を撤して絶後

Osaka Shoin Women's University Repository

に再び蘇るという禅語の味に似ているという。続芭蕉俳諧研究にレオナルドダビンチの「聖晩餐」のキリストの顔とキリストの顔の奥の窓から見える暮方の空との関係に似ていると述べている。一句としてもよく付合としても実にすばらしい。

湖水の秋の比良の初霜　芭蕉

秋。景。すつきりとした琵琶湖の秋。大津あたりから遙か北に見る比良の初霜が降つた朝、しみじみと湖水の秋を感じたというので広々として爽やかな湖水の初秋の気分は前句の匂というべきか。

二の裏（名残の裏）

柴の戸や蕎麦盗まれて歌をよむ　史邦

秋。情。俗事にかかわらない風流人か。それともユーモラスなおどけ好きか。わび住居をしている主が朝起きてみると、蕎麦がぬすまれている。盗んだのは刈り取つてあつた蕎麦か乃至は刈り取つて盗んでいつたのか、金銭に直せば僅かなものであるが、それを狂歌にでも詠もうというのだから風流である。前の句の湖水の秋の比良の初霜を大自然の背景として考えてみるとこれは人間生活の一断面の描写として面白いと思う。

布子着習ふ風の夕ぐれ　凡兆

秋。情。前の句が風流人の生活と思うとこの句はやはり風流を解するさる人物が今は落魄してわびしく貧乏で暮している。肌寒い風の夕ぐれに木綿の着物を着けてみるという気分は前の句とよくついていて面白い。「着習ふ」という動詞の使用も愉快である。

押し合うて寝ては又立つ仮枕　芭蕉

秋。事。うまい表現である。押しあいへしあつて煎餅ぶとんにくるまつて一夜の旅の夜の夢を結びつつ、翌日又旅を続けるという境涯を描いたものである。仮枕という言葉に味がある。布子を着習つたり仮枕の旅の中に人生の栄枯盛衰、有為転変を諷したように思われる。

鑪鞴（たたら）の雲のまだあかき空　去来

Osaka Shoin Women's University Repository

雑。景。「たたら」は「蹈鞴」は足で踏んで空気を吹き送る大形のふいごう。たたらをふむと空まで真赤に見えることがある。

鱗雲が空に残つて残照に赤く輝いている。晩秋にみる夕暮の光景である。前の句の景色としてこの句が存在する。宿のそとの夕方の光景である。

「たたら」は「だんだらの転かもしれないと山田孝雄博士はいつている。

一構へしりがひ造る窓の花　　凡兆

花の定座春。景。文人画の趣きである。柳の向うに屋根が見える。つくづくみると家の窓があつて花が咲いている。中では馬具（鞦。しりがい）を作つているのが見える。詩人墨客が眼前の風景を描いた一幅の画か詩か。「たたらの雲」といい「しりがい作る窓の花」というは中国風の景観で漢詩の趣味が横溢している。

枇杷の古葉に木の芽萠えたつ　　史邦

春。揚句。この揚句も一幅の絵である。

枇杷の古葉に一陽来復、新しい芽が萠え出たというのである。

硬い感じの枇杷の古葉をもつて来たのは面白い。窓の花というので春は酣である。何となく眠くなるような春光の長閑さを感ぜしめて揚句としている。揚句の詠み方としては出来得るだけ長閑かに叙することである。連句は交響楽に似て変化の中に調和と統一とがある。二ノ表以来詠まれた複雑な人事の描写は和歌や発句で望まるべくもない世界で実に連句のみの擅いままにするところである。連句の第一句は発句である。

発句は非常に重要で一座の長老が詠むのが常である。そして発句の味わい、明暗、風格はそのままその連句一巻の傾向を左右することとなる。もし古人の句を発句として用いた時は脇句から同席の人が句を連ねるので脇起しの連句となる。追悼の時などに用いる。芭蕉の恋の句は実に素晴らしくうまい。人生体験の豊かさがそうさせるのか、表現のうまさにものをいわせるのか、所詮は彼独自の心を歌うのであろう、立派である。恋の句は連句の場合一句だけで捨ててはいけない。男女陰陽の理法に従つて恋は二句以上つづけねばならない。

Osaka Shoin Women's University Repository

歌仙では二、三ヵ所まで出してもよい。如何なるものを恋というかについては「その心あるものを恋とす」とある。恋と恋との句の隔ては五句を定法とする。

又歌仙に月が三、花が二、出ることになつている。表五句目（発句秋なれば第三の中に）裏七句目二ノ表十一句目は月の定座裏十一句目二ノ裏五句目は花の定座である。月は前へ上げて出したり、後へ下げて出したり出来るが、花は前へのみくり上げて後へくり下げられないという。月といい、花というは美の代名詞であろう。昔連歌を興行した時は一巻の中で香を焚いたことと思う。そういう所からこういう名が出来たとも考えられる。花の意義も一定していないようである。植物なりといい、非なりといい桜なりといい、非なりという。芭蕉も「花は桜に非ず、桜にあらざるにも非ず」と述べたので後世解釈に迷つたという。しかし花という意義が賞美の謂であるということは何人も異論はないであろう。

歌仙は六、十二、十二、六の三十六句であつて、鳶羽連句は去来九、芭蕉九、凡兆九、史邦九と詠んだ。この中で凡兆は股引。メリヤスの足袋。寝蓙。さし木。食置き。車。櫛。布子。鞦というまことに変つた妙な素材を集めて句にしている。これらの俳人が人生の体験者であり、人情の機微に触れ、ユーモアを消化し、風流に徹していたことを今更の如く驚歎するのである。